

第一講演 田中利典先生

「歯髄保護・歯髄保存の治療法と意思決定」

口腔と全身の関連、オーラルフレイル、国民皆歯科検診といった言葉が広まることで、超高齢社会・人生100年時代における国民の健康観は大きく変化しています。それに呼応するかのように、歯内療法学においても歯髄保護・歯髄保存の重要性が再評価されるようになってきました。深在性う蝕や不可逆性歯髄炎と診断された歯は、従来、抜髄が第一選択とされてきました。しかし歯が失活することで歯根破折や喪失のリスクは高まり、結果として残存歯数の減少につながる可能性があります。これを回避するために、歯髄保護・歯髄保存療法は有効な治療選択肢であり、近年の教科書改訂や診療ガイドラインからも「歯髄を残す」方向性が明確に示されています。本講演では、歯髄保護が注目される背景と各術式を整理するとともに、「歯髄を残すか否か」に対して専門医がどのような検査や評価を行い、意思決定を行っているのかを症例を通して解説します。また、歯の破折や修復治療後に持続する冷水痛などで、抜髄や感染根管治療を選択せざるを得ない注意すべき症例、さらに、診療環境として整備すべき点についてもご提示します。歯髄保護・歯髄保存療法は、患者の年齢や適切な歯科材料・治療環境が揃えばチャレンジしがいのある治療です。歯髄保存か抜髄かの境界線を、受講者の皆様とともに考察します。

第二講演 田中浩祐先生

「生物学的コンセプトに基づいた根管形成・根管洗浄」

21世紀に入り歯内療法を取り巻く環境は大きく変化し、治療の正確性や予知性、患者および術者のストレスは大きく軽減されました。特に歯科用マイクロスコープやコーンビームCT、ニッケルチタンロータリーファイル等は、このことに大きく寄与したと言って間違いないでしょう。一方、病因論や原因に対するアプローチ、すなわち生物学的なコンセプトは大きく変化しておらず、いかに器材や材料の進化があろうと、このコンセプトを逸脱すれば治療の質は自ずと低下してしまいます。根尖性歯周炎の原因は細菌であり、治療においてはこの細菌をいかに根管系から取り除けるかが重要です。特に根管形成と根管洗浄はこの部分において大きなウェイトを占めているため、本講演では根管形成における作業長と作業幅径の考え方、実際の根管形成法、根管洗浄剤について、根管洗浄法等の一連の流れを専門医の立場から整理し、今日の根管形成と根管洗浄の限界についても触れることで、治療を受けられる患者の利益につなげたいと思います。